



TITLE:

米穀取引所の統一

AUTHOR(S):

今西, 庄次郎

CITATION:

今西, 庄次郎. 米穀取引所の統一. 經濟論叢 1930, 30(5): 796-810

ISSUE DATE:

1930-05-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129883>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號五第

卷十三第

行發日一月五年五和昭

論叢

地租改正案に於ける若干問題 . . . 法學博士 神戸正雄
貨幣數量說について . . . 文學博士 高田保馬

說苑

商人の漁業家化 . . . 經濟學士 菅野和太郎
獨逸に於ける Finanzvergleich の理論 . . . 經濟學士 中川與之助
米穀取引所の統一 . . . 經濟學士 今西庄次郎

雜錄

所謂「經濟統計學」に就いて . . . 經濟學士 蛭川虎三
我國に於ける家賃信用保險 . . . 經濟學士 近藤文二
英國に於ける投資トラストの近況 . . . 經濟學士 一谷藤一郎
佛蘭西の地方財政 . . . 經濟學士 武田長太郎
我國の鐵道資本について . . . 經濟學士 北原信男
四民平等令と百姓一揆 . . . 經濟學博士 黑正巖
近着外國經濟雜誌主要論題

米穀取引所の統一

今 西 庄 次 郎

は し が き

我國の取引所に就いては、斯くあつて欲しいと思はれる點は少くないが、その地方取引所を整理し統一するといふことも、主要なるものゝ一である。實際、その統一せらるゝに於て、今日、取引所に對して唱へられてゐる諸種の弊短の大きいに改善せらるべきものあるを信ずる。本文は米穀取引所に就き、その經濟上に於ける地位より論じ、米穀の正しき配給の爲に其の統一の必要な所以を明にし、その整理に就いて説かんとするものである。

一

人々の經濟生活が交換によりて——貨幣を用具とする——分業的に營まるゝ社會にありては、社會に提供せられたる貨物を夫々消費者の許に配給することが行はれなければならない。而して其の配給の過程は必ず二の要件より成立つものである。一は各貨物の他と交換される割合即ち價格を定めることであり、他は貨物を其の提供者より消費者の方に移すことそれである。¹⁾このことは分業的な社會には常に必要とする所にして、唯其の組織の如何によりてそれが行はるゝ形式を異にするのみである。

分業生活の基點が社會全體に置かれ、其運営が社會の手によりて行はるゝ社會主義組織の經濟

1) 之は物が生産提供者より消費者の方へ移ることをいひ、その場所的移轉では、
ない。しかし人への移轉が場所的移轉を含めるとは勿論である。

社會内にありても、同様に、その貨物の配給には價格を定むる必要がある。蓋し人間が生まれながらにして有する公正觀念は、他との相對的關係に於て、その妥當なる大いさの定めらるゝことを要求するからである。唯此の社會にありては、その機構上、其の價格も社會公に、主としてそれが生産に要する勞費を標準として定めらるゝことであらう。次いで貨物を消費者の許に移すことも、公の統制の下に、例へば各地に置かれたる集散機關を通じて秩序的に行はるゝことであらう。

しかし吾々の經濟社會は、分業生活の基點が個人に置かれ、其の自由なる活動によりて運營されてゆく個人主義組織である。即ち人々は各々社會の爲に何等かの生産若しくは非生産の業を營み、その提供に對し社會他人より貨幣にて受け、それを以て、社會より必要なる資料を求めて各自の生活をたて、また業を營むの資となすのである。從てこゝに於ては、各人の經濟的地位は彼等が種々なる名儀にて得たる貨幣の高に依存することとなり、次第にそれを目差して努むるに至るものである。

貨物の提供が、斯の如く、廣く社會に對し利益を得んがために行はるゝときは、それは所謂商品である。然らば吾々の社會にありては、諸種の生活用品は益々商品といふ姿をとりて存在し、貨物の配給は商品の配給となるわけである。

而して此の社會に於ける商品の提供者より消費者への配給は、その機構上、各個人の自由なる需要と供給との適合即ち各個の賣買取引によりて行はれてゆくのである。故に配給に於ける貨物

の價格を定めること、並びに貨物を移すことも、各個人の間に行はるゝに任されてゐるわけである。従て此の社會に於ては、假令同種の商品にしても、それには種々なる需要、供給が存し、その價格は各場合によりて相違せる大いさにて多數に存在すべく考へられる。然るに實際に於ては、成る時に於ける商品の價格は概ね一定して、市域内²⁾に於ける取引は殆ど同じき價格にて行はれんとするものである。斯の如き價格を其の時に於ける其の商品の相場 Quotation 或は公定相場と呼ぶ。

蓋しそれは營利經濟の特質として、供給者はより高き需要につかんとし、需要者はより低き供給に求めんとするに基く。取引は初め生産者と消費者との間に直接的に行はるゝも、分業生活の範圍が大となり商品が大量的となりて、彼等の間にそれが媒介をなして利益を營まんとするもの即ち諸商業者を次第に介在せしめて、此の現象を進むるものである。云ふ迄もなく、供給とは或る分量の商品を或る價格にて譲渡せんとすることであり、需要とは同じくそれを取得せんとすることである。併し總べて供給者の持つ賣價なるものはその最低の限度を示して、寧ろ出來得る限り高くそれを譲渡せんことを求むるものであり、又需要者も出來得る限り安くそれを取得せんことを努むるものである。即ち供給者は廣く需要界に向つて自己の供給をよく満たさんとし、之に對し、需要者は相手方たる供給者を特定せず、廣く供給界に向つて自己の需要をよく満たさんとする。此の一切の需給の競合關係をなすことが、結局、市域内に於ける商品の取引價格を一にせなければ已まないものである。

2) 需要、供給の關結する一定の範域を指し、所謂廣義若しくは抽象的な市場と同義である。

或る時に於ける市域内には當該商品の種々なる値と量を持つ需給が多く存在するであらう。併し夫等が現實に結合して取引となるのは、上述の如くにして、互に他によりて認めらるゝ、換言すれば他を満たす價格の範圍内にあるものゝみに限り、その價格以外のものは、依然として、需要とし又供給として取残されるのである。彼等は新に起り來る需給と共に次の時點に於ける需要、供給となる。

斯くて吾々の社會に於ても、商品の價格は市域内に客觀したるものたらんとする。されど其の客觀的なことは、現在に地域的なものみに止まらない、上には需要、供給を一概に見なければ、それは内容的に云つて、實需給と投機的の需給とを含んでゐるのである。個人主義の經濟社會にありては、商品の需給は常に變動し、從て其の價格は騰落するものであるが、營利經濟の特質として、實需給者も現在のみを見ずして將來をも考慮し、それに利處せんとするに至るのである。殊にその將來の需給の状態を豫想し、價格變動による差額を利せんとする商業者の投機的の需給が追々と混するに至るものである。乃ち斯の如き需給の投合によりて生まれる價格が既に將來を見越し、その價格を現在に織込んだものとなることは容易に考へ得られるであらう。

此の價格の時間的客觀化は、經濟社會の發展に伴ひ益々進められる。需給は又之を現在の需給と先物需給とに分ち得るのである。茲に現在の需給とは現在に商品の受渡せらるゝ需要、供給をいひ、先物需給とは契約は現在に行はるゝも其の受渡は將來に期せらるゝ需要、供給を云ふ。經濟社會の幼稚なる頃は物の需給は殆ど現在のものなりしが、その發展と共に、實需、實給も次第に將來に延長せられ、特に投機的なる需給は先物の形に於て一層盛に、且つ自由に行はるゝに至るものである。而して、云ふ迄もなく、此の需給の先物需給となりて現在の需給に混行するに至る

ことは、價格の時間的客觀化を一層助くるものである。

既に知らるゝ所であらうと思ふが、價格が時間的に客觀化するとは、それが或る時期の間不動に止まることを云ふのではなく、或る時に於ける價格が既に將來を見通し、知られてゐる強弱材料を悉く織込んでゐることを意味するものである。従て價格は時の進むにつれて絶えず變動すべきである。唯、上の如き價格の客觀化は、その變動を斷切的より芯となるべき部分を與へ、それを基とせる動搖たらしむるに至ることは事實である。

之を要するに、個人主義分業經濟社會にありては、その進むにつれ、商品の取引は地域的に、又時間的に客觀化されたる價格即ち相場に於て行はれんとするに至るものである。而して取引が斯の如く相場に於て行はれんとするは、上に述べたるが如く、各個の需要者、供給者の營利心に基くものであるが、それら個人の營利的なる動きは、社會的見地よりすれば、個別的なる又一時的なる價格の非違を欲しない又許さないといふこととなり、全體として、需給は公正なる價格にて結合するといふ機構を生ぜしむるものに外ならない。營利經濟の發展が之を強むることもとりである。既に吾々の社會にして取引が益々客觀的な價格に於て行はれ、換言すれば、商品即ち財貨が公正なる價格に於て移轉せらるゝものとせば、その配給を圓滑に行はんがためには、その要求に従ひ、より公正なる相場を、より速に示與せらるゝやうにすべきこと云ふ迄もなからう。

以上は配給界に於ける相場であるが、夫は又其の兩側にある生産提供、消費界を指導するものなることを附加して置き度い。既に知らるゝ如く、個人主義の經濟社會にありては、商品に對する消費は各人の自由にして常に増減するのみならず、その生産提供も直接には利益を目標として營まれ、従て當該市域内に於ける其の提供量と消費量とは直ちに相應せず、無政府的の狀態にあ

る。けれども此の兩者の不適合は相場によりて匡されるものがあるのである。蓋し相場なるものは、當該市域内にある、當該商品のあらゆる需給が相觸れて生まれたるものにして、それは消費と生産提供の實勢關係を、投機的の需給を加へることにより、出來得る限り正しく、相當將來までも示せるものと云ふべく、斯の如き標準は又生産提供、消費界に反射してそれを動かすからである。生産者は利益を目標として生産提供を行ふものであるが、その利益の有無大小は當該商品の相場を標準としてそれに對する原費によりて知るのであり、又消費者の消費も（彈力性の大小によりて相違はあれど）その相場の高低に反比例して現れんとするものである。若し提供の消費に超えて飽和の状態にある時は、相場は下りて利益は少くなるが故に、夫に對する生産提供は減少すべく、一方消費も増進せんとし、反對に提供の消費に足らざる時は、相場は上りて利益が多くなるが故に、夫に對する生産提供は増加すべく、一方消費も節約せらるゝものとす。即ち生産提供量と消費量とのバランスは或る時期の間に自らとられんとするに至り、全體的意識的統制の行はれざる吾々の商品生活も此の相場といふバロメーターを持つことによりて、その甚しき混亂より救はれるものである。

終りに一言すべきは、相場は各々自由なる競争關係にある需要と供給を持つ商品に關するものにして、その何れか一方が秩序的に統一せられ、夫々相手方たる需給界に對するが如き商品に關せざるものなることである。斯かる商品の價格なるものは、或は公の力により、或は私の獨占的力によりて定められ、上述の相場に關する説明の一應抽象せらるゝこと云ふ迄もない。

二

前段に依りて吾々の經濟社會は商品の相場を必要とし、商品の取引、從て其の配給は客觀的な價格に於て行はるゝことを求むるを知り得たであらう。然らば斯の如き要求は如何にして満たされるであらうか。

相場が地域的、時間的に客觀性を有つ價格である以上、それを立つるに、市域内の諸多の需給を集中せしめなければならぬことは云ふ迄もない。商品經濟の未だ進まずして、市域の狭小なりし頃において、取引は生産者と消費者との間に直接に行はれ、彼等はその出合をよくせんがため、市域の中心地に集りて賣買をなしたるものにして、その市場には需給が集中して（幼稚ながら）相場の立つと共に、各商品はそれによりて移轉せられたのである。分業生活が進みて、市域も擴がり、それに於ける商品の需給の増加するに至りて、生産者、消費者は其の供給、需要をよく満たさんがため、その間に媒介を業とする商業者を追々と介在せしむるに至つたのであるが、之等の商業者は多數の消費者の需要を集めて生産者の供給に對せしむるものにして、從て當該商品の相場は自ら彼等を中心として生まれ、生産者より消費者への商品の移轉も大體に於てそれによりて行はれんとするに至つたのである。しかし市域が一層大となり、その大量的にして需給の多き商品にありては、彼等商業者の間に分化を生じ、直接多數の消費者に接する小賣商業者の外に卸賣的商業者を存在せしむるものにして、後者が前者の需要を集めて生産者の供給に結ぶに至

るのである。(生産が多數小規模に分散するときは集買者を介在せしむることがある)卸賣商業者は多く都市附近に據るものであるが、彼等の集りは一の市場を形成し——有形の市場的设备を有するもある——當該商品の相場は主として之に於て生まるゝと共に、小賣商業者の如きは夫を標準として、自己の店舗其他に於て専ら商品移轉の役目を營むに至つたのである。

けれども經濟社會の益々發展し、市域が地方的より全國的へと進むに至りて、その大量なる商品の配給の状態は又變化するに至つた。既に知れる如く、相場を定むるには市域内にある需給を集中せしむることを要し、又之を集中する程、より客觀性を有つ相場を立て得るものである。併し價格といふ點を離れ、配給の他の要件たる商品の移轉といふ點より云へば、それは必ずしも集中を必要とせず、寧ろ出來得る限り地方的に行はるゝを利便とするのである。然るに吾々の經濟社會に於ては、商品配給の價格の決定とその移轉といふことは切離すことを得ずして、一の需給の結合即ち賣買取引によりて行はるゝのである。市域の甚だ廣からざる場合には、上の如くにして——市域内に於ける需給の大部分は直接、間接に集中せしめられた——兩者を併行し得るのであるが、市域が擴大し、分量が大に、需給が多くなるにつれ、その併行を進むことは次第に困難とならざるを得ないのである。此處に於てか、全國的な廣大なる市域を擁する、大量且つ需給の多き商品にありては、各地方に夫々市場を存在せしむると共に、その需給の集まること最も大なる市場が中樞的なる市場として、漸次各地の市場に對して其の需給調節の地位に立ち、特に此の頃に旺となれる先物需給も多くは之に集まりて、そこに生まるゝ價格は自ら市域全體をリード

するに至るのである。之に對し各地方の市場にありては、夫々その地方に於て當該商品の集散せらるゝと共に、その取引は中央市場に於ける價格を標準とし、それに追隨して行はれんとするに至るのである。

但だ原料、半製品の如く一般的な消費物に非ずして、比較的に少き需要者を持つ商品にありては、小賣商業者の如き商業者の分化を見ないのみならず、その市域が大となり、その分量が大となるも、上の如き市場が各地に存在するの事象は著しからず、何處か主要地に於ける市場に大部分の需給が集中せられ、相場作成と集散移轉の二が行はれんとするものである。

今日、重要商品と稱せらるゝものは、大體上の如き方式によりて相場による取引が行はれつゝある。けれども其の一段大量的であり、取引が盛に、その價格が種々なる經濟事情によりて變動し、その大いさが國民經濟に切實なる關係を持つ商品の中央市場に於ては、その相場標定の作用は次第に純粹に進んで居つたのである。普通の中央市場にありては、その需給は多くは實物に關するものにして取引は實物的である。取引が實物的であるとは、その即時の取引は勿論として先物取引も、それが實取引たると投機的のものたるを問はず、多く實物の受渡に終はることを云ふのである。需要とは或る價格にて物を取得せんとすることであり、供給とはそれを讓渡せんとすることである。併し物の授受なくして其の目的を達し得る場合少しとせず、個人主義經濟社會の發展するにつれ、斯の如き需給は益々増加し來るものである。之等は何れも價格に關するものであると共に、また之を相場を立つるといふ點より純粹に考察するならば、實物そのもの、授受

といふことは必ずしも絶對的な要件であるとは云ふを得ないのである。唯、物の授受が技術的に切離されたる需給のみにては到底正しい相場は立ち得ないのである。要言すれば、實物的な需給に斯の如き需給を混行せしむることが、具體的に云へば、轉賣、買戻による清算を認むることが、相場を立つるに差支なく、寧ろ妥當なる相場を立つるに有用ならば、その限度に於て夫等を加へてよいわけである。今斯の如き需給の混行を認め大量的なる取引を行はしめんには、諸種の規律の下に秩序正しく之を行はしむる必要がある。中央市場に於て斯かる取引の行はるゝに至れるもの即ち取引所である。

然らば取引所を有つ商品界に於ける取引所即ち清算市場と各地市場との關係は極めて明瞭なりと云はねばならぬ。取引所の本質は相場の標定 *Preisbildung* にあり、その數は全市域内に唯一なるべきものである。それは各地市場を調節する地位に立ちて、現在、將來の諸多の需給を集め清算大量取引を營むものである。之に對して、各地市場の本質は實物の移轉にあり、その數は市場内の主なる生産、消費の地に多く存在すべきものである。それは取引所に於ける價格を標準として、専ら商品の集散取引を行ふものである。——其處に集散を目的とせざる需給は集まるべきではなく、夫等は市場の職能を妨げるものである。即ち上の如くにして當該商品は最も客觀的な價格に於て圓滑なる配給が行はれんとするのである。

三

以上は商品の配給に就いて一般的に要述したのである。以下之を基として當面の米穀に就いて考察しよう。

米穀が我國に於て何人にも缺くべからざる日々の食料品であると共に、その生産が（季節的な特徴もある）小規模に多數の國民によりて營まれつゝあることは、その集散移轉が圓滑に行はれ、その價格が妥當なる大いさにあることを必要とするは云ふ迄もない所であるが、それが全國的な市域を擁する大量の商品となれることも明なる所である。全國的な市域を有つ大量商品とは、既に知れる如く、その産地の如何を問はず全國に供給せらるべく、又全國より需要せらるべきものにして、その品質の統一なるものが大量に存在することを云ふのである。然らば米穀の取引配給は、前述したる所に従ひ、中央に取引を設けて全國的に且つ時間的に最も客觀せられたる相場を立つると共に、各地に集散市場を存在せしむる状態を適當とし、又必ず夫に向つて進みゆくべきものである。

之を實際に就いて見るに、徳川時代に於ては未だ地方經濟の域を脱せざりしが、猶ほ各主要都市に於ける市場に對し、大阪の如き大いなる市場は次第に清算市場としての實を具へつゝありしものにして、明治に入りて國民經濟の確立するや、それは取引所として發展するに至つたのである。然るに當時は取引所なるものゝ本質が誤解せられ、宛も正米市場として施設せらるべかりし所にも濫りに取引所が設立せられ、清算取引が行はれたのである。けれども斯の如き取引所の、取引所としての存在性を有せざるやいふ迄もない。或は取引所の各地に存在するは互に牽制して

妥當なる相場を立てしめ得るとも考へらるゝであらうが、實際には然らずして、その主たるものに對し、他の地方取引所はそれに追隨して所謂寫眞取引を行ふに過ぎず、然もその市場の狹小なることは、動もすれば、投機的の非違が企てられ、配給の圓滑なる作用を亂さんとするものである。即ちそれらの地方取引所は、經濟界、米界の狀勢によりて變遷がありたるも、中央取引所の發展するにつれ、益々その存在の餘地を失ひ、單に投機の機關としての存在を保つに過ぎざるに至らざるを得なかつたのである。近來、地方取引所の解散、合併或は正米市場への轉化の試みの相次ぐは、その既に投機機關としての外に全く存在の意義を有せざる取引所が、經濟界の不況に基く投機心の萎縮によりて自然に淘汰せらるゝものに外ならない。而して斯の如き事象の支持すべく、助長すべきものたること云ふ迄もない。政府に於ても此の趨勢に順ひ夫等群小取引所統一の方針を立てつゝあるが如くであるが、吾人は理想としては其の取引所の一なるべきを信じ、少くとも大阪、東京の二ヶ所位の原則の下に、可及的に地方取引所の廢罷せられんことを所望して已まないものである。

我國にありては、米穀の配給に關し、その取引所を統一するの必要にある。併しかの合併運動の如きは其の統一の方法には該當せないものである。既に知れる如く、取引所の統一は、公正なる相場を標定せんがため、從來、各地の清算市場に集まりし需給をも集中せしめんとするにあり、従て夫は地方取引所の取引所としての活動(清算取引)を廢罷せんとするものである。然るに最近に見る取引所の合併運動なるものは、企業——我國の米穀取引所は總べて株式會社組織である

——としての取引所營業の合同に外ならず、それは米穀と株式の如き異種物件の取引所の間にも企てられ(縦斷的合併)、又同じく米穀取引所の間に行はるゝも、從來の取引所を所謂支所として存続せしめんとするものである。若しその合併によりて從來の取引所を廢罷すべきものとせば、彼等特に合併する地位に立つ取引所は必ずや之を避くるであらうと考へられる。即ち取引所の合併運動なるものは、吾人の所期せる取引所の統一を齎すものではないのである。斯くて取引所の正しき統一を致さんには、群小取引所をして、その存立満期に到達したるものは斷然之を解散せしめ、然らざるものも之を懲慙して自發的に解散せしむるの方針を進むべきものと云はねばならぬ。

翻て正米市場(實物市場)に就いて見るに、從來我國に於ては、此の方面には積極的な施設が行はれてゐなかつたものゝ如くである。けれども米穀の配給上、その實米を集散して滞りなくからしむる市場を必要とするや云ふ迄もなく、又主要なる土地には自ら正米市場が存してゐたものである。而して正米市場の存在し又存在すべき所は、性質上、消費地並びに生産地に近き都市である。米穀の移轉が廣く農村に於て生産せられたるものゝ中、その消費せらるべき部分を除き、都市の商工其他の階級に向けらるゝに於て、主なる都市に卸賣業者を中心として取引の行はるゝ市場的施設の生まるべきは云ふ迄もない。生産地に需給の集中するといふことは、内地にも見らるゝであらうが、殊に朝鮮、臺灣の如き移出米を持つ所に於て、その中心的なる都市に生まるゝものである。近時、政府は此の方面の充實に努め⁴⁾、地方取引所を廢して寧ろ正米市場の發達を計ら

4) 先般、正米市場令が制定せられた。

んどして、現にそれら取引所の存在する地域に正米市場を優先的に設置せしむる方針を立てつゝ、ありと云はれる。併しながら既に夫等の地方に正米市場の存在せるものもあるべく、又それらの地域に實物集散の市場を設置する必要のなきものもある。即ち私は地方の群小取引所は之を廢罷するの原則を進むべく、唯その清算取引を罷めて實物取引にても相當の取引を續け得る、換言すれば、その土地が實物集散の地にして近くに正米市場の發達してゐない場合に於て、そこに優先的に正米市場の設置を認むるが妥當なりと信ずるものである。但し其の市場の構成が取引所と異りて實米業者の集團たるべきこと云ふ迄もない。

次に取引所の正米市場の併合に就いて要言し度い。取引所は市價標定の機關にして、それは市場全般に對し地域的に、時間的に最も客觀せる價格を標示して、當該商品の移轉を最も公正に、速に行はしむるものである。從てそれは物自體の移轉を直接の目的とせるものではなく、配給に於けるその方面の職能は寧ろ各實物市場以下に任されてゐるものである。けれども此の事は清算市場と實物市場とが離れて存在することを意味するものではなく、前者は後者と離れては到底正しい相場を立て得ないのである。換言すれば、清算市場は各實物市場と結合してこそ、よくそれに於ける價格が市場取引の標準として權威を持ち得るのであり、又その經濟上に於ける機能を果し得るものである。然るに從來の我國に於ける取引所を見るに、それは投機的技術に偏して實米市場と隔絶してゐた嫌がある。從て時には取引所に於ける相場が正米市場以下を追隨せしめ得ず、期米が正米と別個の存在をなしたることが往々にして存したのである。而して斯の如き弊を避け

んには、即ち清算市場をして實米市場と結んで眞に取引價格の標準を出さしめんには、正米業者をして取引所を利用せしむるの外はないのである。正米業者をして取引所を利用せしめんには、必ずしも取引所の取引員そのものが正米業者たるを要すとは限らないのであるが、取引員が正米業者たる場合にその目的を達し得ることの多きは事實であり、又既に述べたるが如く、取引所が正しく發展したるに於ては、それは正米業者（卸賣業者、問屋の如きもの）を本體として成れる筈のものである。最近に於ける、取引所の既存の實米市場を併せて正米部となし、或は正米部として實米市場を設くるは、直接には、株式會社としての取引所がその取引高の増加を計らんとするものに過ぎない。取引所即ち清算市場と正米市場とは近接せる構内に存しなくてはならないといふものではなく、又取引所が現今の所謂株式組織になれる場合、その経営下に統一するを要するものでもない。取引所と實米市場とは結合せしむべきものであるが、その結合は斯かる形式的のものには非ずして、上述の實質的なものでなければならぬのである。唯、正米市場の併合、設置が、やがて上の實質的な結合状態を馴致するものありとせば、國民經濟上、意義あるものと云ひ得るであらう。

米穀取引所、正米市場に就いては、その組織、並びに取引方法等諸種の問題あれど他日に譲り、茲には夫等の經濟上に於ける地位、關係を要論するに止める。